

打ち上げるという計画で、ユニークな方法と言えると思う。これを一つのきっかけとして、次々と各方面の新技术利用が始められることが望まれる。

新技术に関して日本の重要な役割の1つは、何といっても TAO の月レーザルーチン観測体制を早く完成させることであると言えよう。月レーザで極運動を知るためには最低2か所の観測所が必要であり、またマクドナルドと東京という組み合わせは良い精度を出すという研究報告もあって、日本に大きな期待がかけられている。

衛星ドブラーによる離島の位置決定、および固定受信局における問題点の研究、などの報告もあった。ドブラーの国際システムはほぼ完成の域とはいえ、個々の観測にはまだまだ不明な点も多く、天文観測との比較も含めたより詳細な検討が必要である。これは総合的な施設を持つ ILOM にしてはじめて可能なのではなからうか。

「VLBI」に関しては、本誌78年3月号の川尻氏の記事にあるように、基礎的な実験においては日本でも成功を収めた。また天文学用の大型電波望遠鏡の建設も始められた。ともかくこれで、大陸間 VLBI 測地は1歩実現に近づいた。将来は、ルーチン的に測地観測のできるアンテナをぜひ獲得したい。

ところで前記の研究会のことでもう一つ述べておきたいことは、キエフのシンポジウムで懸案となり、今回のモンテリオール総会に向けて国際的に検討が進められている「章動常数」の問題について、日本国内でも W.G. を作ってこれを検討し、タイミングよい提案を行なうことが決定された、ということである。TAO の木下氏を代表とするこの W.G. は、数回の会合の後、昨年前半に我々の案をとりまとめ、IAU の W.G. 委員長ザイデル

マン宛にスピーディに送付した。その内容は、(1) 章動の軸としてはグルノーブル決議に従う、(2) 採用値は地球の非剛体性をも考慮した、観測によく合う値とする、実際には剛体の値にモロデンスキーの理論による補正を加えた値を用いる、(3) 剛体地球の章動値は木下氏の理論による計算値を用いる、というものであった。この提案の結果、昨年7月に届いたザイデルマンからの回状 No. 1 では、我々の主張がほぼ全面的に採用されることとなり、国内の W.G. も大いに気を良くした。このことは、地理的・言語的なハンディを感じている日本の天文学でも、タイミング良い積極的な働きかけは国際的に大いに効を奏するというを示していると思う。

このように考えると、日本が、積極的な働きかけによって世界の天文学の中で重要な役割を果たして行く可能性は他にもいろいろあるように思われる。前に、BIH やキエフ学派などの活動の盛んな所は、指導者の個人的なファクターが大きいことを述べたが、このことはこれらが人間の移り変りとともにどこかの地にも移転、あるいは発生し得るものであることを意味する。そう言えば、ハイデルベルグでフリッケを中心に行なわれている恒星カタログの仕事、少し異なる分野だがスミソニアン天文台(SAO)のマースデンの仕事なども似たような傾向にあるのではないだろうか。

おわりに

この稿を書くにあたって、TAO 土屋氏、木下氏、ILOM 横山氏、角田氏から、写真や各地の情報の提供を受けたので、紙面を借りて謝意を表します。ただし本記事の記述は、筆者が主観的に再構成したものです。

学会だより I

東京天文台の一般公開

恒例になった東京天文台公開が、昨年も本会後援で11月11日(土)に行われた。午後2時の開門と同時に待ちかねたように多数の見学者が入構し、ロビー等に展示さ

れたパネルや、特設の質問コーナーで係員の説明に熱心に聞き入っていた。何といっても天文台の象徴である望遠鏡には長蛇の列が出来、特に夕方からは月面観望のため時間待って秒間しか月面を見ることができなかったというような有様であった。幸いまずまずの天候で、見学者も3千余名の多きに達し、成功であった。

